Ⅵ　調査・研究報告

施設の特色を活かした体験学習の取組み

難波田城資料館　和田晋治（しんじ）・駒木敦子

難波田城資料館には、昔の暮らしや道具についての学習のため、市内の小学校 3 年生が社会科見学に訪れる。当館は、市内でもはずれにあり、しかも交通の便が非常に悪いため、来館するのは 11 校のうちの約半数ほどであるが、4km 以上の道程を徒歩で往復するところもある。見学の内容は、学校によって異なるが、要望があれば古民家や昔の道具などを利用した 2 ～ 3 時間の体験型の授業を行っている。

小学校低学年への説明は、いかに分かりやすく、簡潔な説明ができるかがポイントであるが、なかなか容易なことではない。いくら授業とはいえ、つまらない内容では児童は興味を示さないし、集中力が持続せず飽きてしまう。そのため、説明は必要最小限に止め、体験を主体としたものとしている。耳と目だけでなく手や足を使うことでの効果は、児童が積極的、意欲的に取り組む姿勢からも明らかである。また、先生にも児童と一緒に体験をしてもらうようにしている。ベテランの先生ならともかく、若い先生は知らない、はじめてという場合がほとんどである。児童と体験を共有することは大切であるし、今後の指導にも少なからず役立つはずだからである。

体験の内容は、①古民家の説明②稲の脱穀③石臼挽き④はたおり⑤あかり、というのが通例であるが、先生の意向や見学時間によって構成を変更する。また、脱穀する稲がない場合は、藁を使って縄ないなどに代替している。①と⑤は児童全員、②から④はクラス単位とし、ローテーションで回る。

①古民家の説明

説明は 10 分程度とし、今から約 130 年前に建てられた農家であることや間取りについてなど簡単な内容を話す。現在の家との違いを意識してもらうために、今どんな家に住んでいるのか、次ぎにどんな材料で建築されているかを聞いてみる。「屋根は何でできている？」との問いには「藁」、「壁は？」には「コンクリート」という答えが必ず返ってくる。正解を話しつつ、昔の家は鉄やコンクリートは使用しておらず、すべて身近にある天然の素材で作られていることなどを説明する。時間があれば内部に案内し、土間やカマド、囲炉裏についても説明する。また、玄関の出入りに際しては「昔は敷居を踏むことは、その家の主人の頭を踏むようなものだ」といわれたことを話す。すると、児童は土台を踏まないようにそろりと跨いでいくのだが、その素直さがとても微笑ましい。

②稲の脱穀

園内の水田で収穫した稲の一部を体験学習用に保管し、使用している。使用する道具は千歯扱きと足踏み脱穀機で、どちらも市内の農家から寄贈された民具資料である。同種の民具は、当館でも数多く収蔵しているが、一番状態の良いものを使用している。

まず、田植え、稲刈り、天日干し、脱穀、籾摺り、精米という米の生産過程を簡単に説明する。次に、脱穀の方法を実演して見せる。脱穀作業や道具がどのように変遷してきたかわかるように、何年前に使用されていたかをふまえながら扱箸、千歯扱き、足踏み脱穀機の順で実演する。ただし、扱箸は現存していないため、文献をもとに製作したものである。扱箸の実演で、児童からは必ず「おおーっ」との声があがる。たいした作業ではないのだが、反応が良いのが意外である。

作業方法のポイントと注意事項を説明し、児童は千歯扱き、足踏み脱穀機の順で体験する。児童が作業し

やすいように、稲は一握りくらいに小分けにして渡す。一人一回しかできないが千歯扱きと足踏み脱穀機との作業効率と労力の違い感じてもらう。足踏み脱穀機は、バランスを崩すと怪我をするのでペダルは踏ませていない。一巡したところで、脱穀した籾の殻を剥き、米が入っていることを確認させる。時間に余裕があれば、唐箕による選別作業も実演している。最後に、残った藁も縄、ムシロ、草履などの日用品や堆肥、家畜の餌などに無駄なく利用されていたことを補足する。

③石臼

よく炒った大豆を持参してもらい、古民家内に常設している石臼で挽いて粉にする。一人で回したあとは、数人で回し、違いを感じてもらう。挽いた粉は、よくふるって殻と分け、すぐに食べられる状態しにして持ち帰ってもらう。

④はたおり

古民家内に常設している機織り機 3 台のうち、1 台を体験学習専用としている。機の準備は、当館で活動している機織りサークルにお願いしている。機織り機 1 台で、100 名近い児童が体験することになるので、一人の体験は杼を一往復させる程度となってしまう。

ちなみに、機織りサークルが園内の畑で綿花を栽培し、機織りまでの一連作業を行っている。2 月から 4 月にかけては綿繰りの体験もできる。

⑤あかり

雨戸を閉めきった古民家の中で行う。導入として、火打ち金と火打ち石、マッチといいた昔の発火具、灯芯と難波田城跡から出土した中世・近世の灯明皿を見せる。照明を落とし、行灯（ろうそくで代用）、灯油ランプ、電球の順で点灯し、明るさの違いを体験する。普段、どんなに明るい場所で生活しているか、日常生活にはかかせない電気の便利さを学習してもらう。ホヤを洗うのは、子どもの仕事だったことも伝える。

以上が体験のおおまかな内容である。現在は、工場で製造されて販売されているのが当たり前の品物が一昔前はすべて手作業で作られていたこと、たいへんな手間と時間をともなっていたことなどを、体験を通して学習してもらう。それ以外にも、児童に伝えたいことは山ほどあるが、あまり欲張っても散漫な印象となるだけであり、児童が理解しきれるはずもない。まして、昔の生活のごく一部のことでしかなく、そのすべてを知るにはほど遠い。児童の感想は一様に「楽しかった」である。楽しいだけでよいのかとの考えもある。しかし、ここは学校ではないし、そこまで求められているわけでもない。当館としては限られた時間の中で、必要最小限の事柄を伝え、興味を引き出し、多少なりとも授業に役立ててもらえれば成功ともいえる。もちろん、児童がこれをきっかけに歴史などに興味をもち、後日また家族で来園してもらえるようであれば、幸せなことである。今後も、学校からの要望もふまえながら、資料を活用した体験学習の充実を図っていきたい。